

# 搾取の進化：ローマ征服から現代資本主義まで

「人間という獣に気をつけよ。彼は悪魔の手先である。神の霊長類の中でただ一人、彼はスポーツや欲望や貪欲のために殺す。まことに、彼は兄弟の土地を奪うために兄弟を殺すだろう。彼を大勢に増やしてはならない。さもなくば彼は故郷と君の故郷を砂漠に変えるだろう。彼を避けよ。彼をジャングルの巣窟に追い返せ。彼は死の先触れなのだから」

——『猿の惑星』 ザイアス博士

人類の破壊能力は、私たちの社会システムに内在する根本的な欠陥——際限ない蓄積と支配の追求——に由来しています。他の生物種が自然の限界の中で生きているのに対し、人間は少数のエリートが多数から富を搾取することを可能にする、ますます洗練された搾取システムを発展させてきました。このエッセイでは、ローマの軍事征服から封建貴族制、そして現代資本主義に至るまでの、これらの搾取システムの進化をたどり、それぞれの段階がいかに統制の仕組みを洗練させながら、同じ本質的な搾取の構造を維持してきたかを考察します。

## 起源：ローマ帝国と私有財産の誕生

ローマ帝国は、軍事征服による大規模搾取の最初の体系的枠組みを確立しました。ローマの司令官や兵士たちは征服した土地を報酬として与えられ、暴力と財産所有の間に直接的な結びつきが生まれました。これは単なる戦利品ではなく、征服を富の創造手段として制度化したものでした。

このシステムを特に人間的なものにしたのは、「権原 (title)」や「所有権」という抽象的概念の創造でした。動物は本能と即時的な必要性に基づいて縄張りを守りますが、ローマ人は土地の権原移転を記録する複雑な法体系を発展させ、征服に基づく永続的なヒエラルキーを生み出しました。これにより歴史に響き続ける先例が確立されました——暴力と支配は正当な財産権に転換されうる、というものです。

被抑圧階級（奴隷、平民、征服された諸民族）は、税金と労働を通じてこのシステムのコストを負担し、エリートは所有の恩恵を享受しました。これが、搾取される側が現状維持に必要な軍事・法制度を税金で自ら支える、最初の巨大なシステムでした。

## 封建への移行：貴族制と血統特権

ローマ帝国が封建ヨーロッパへと移行する中で、搾取システムは変容しながらもその核心原則を維持しました。軍事征服は世襲貴族制へと置き換わり、富と権力は直接の征服ではなく、貴族の称号と血統に結びつけられました。土地所有は世襲となり、個人の功績ではなく出生に基づく恒久的な階級が生まれました。

封建制度は荘園制を通じて搾取を洗練させました。農奴は領主の土地を耕す代わりに「保護」を受けるとされましたが、これは搾取を相互利益として覆い隠した巧妙な支配形態でした。農奴は領主に税を納めるだけでなく、軍役も義務付けられ、実質的に自らの抑圧に資金を提供していました。

このシステムの特に有効な点は、宗教的・文化的物語との統合にありました。「王の神権」や社会の自然秩序が教会と教育を通じて押し付けられ、階級制度は必然的かつ道徳的に正当化されたものと見なされるようになりました。被搾取者自身がその地位を内面化し、構築されたシステムではなく自然なものだと受け入れるようになったのです。

## 現代の革命：抽象的富と静かな搾取

最も重要な進化は、資本主義と産業革命の勃興によってもたらされました。貴族の称号はほぼ時代遅れとなり、はるかに効果的な搾取システムが生まれました。現代システムは、目に見える貴族制を「見えない所有」に置き換えました——企業、金融機関、複雑な法構造のベールに隠された、資源・資本・権力の秘密の集中です。

搾取の仕組みはより抽象的かつ洗練されました：

- **地代搾取**：労働なしで土地・不動産の所有から収入を得る
- **利子搾取**：金を貸すことで永続的な債務義務を生み出す
- **資本増価**：資産所有により市場メカニズムを通じて富が指数関数的に増大する

現代の被抑圧階級は、警察・軍事・法制度を支える税金を通じてこのシステムを支え続けています。これらの制度は私有財産権の保護と債務の強制執行のために存在します。このシステムが特に陰險なのは、公平さと流動性の幻想を作り出す点にあります。封建制のような露骨なものとは異なり、現代の搾取は「能力主義」「自由市場」「自己責任」という物語によって隠されています。

## 価値観の腐敗：倫理より貪欲

この進化の過程は、人間の価値観を体系的に腐敗させてきました。倫理や道徳よりも貪欲を報酬するようになり、各時代の搾取システムは蓄積を正当化する文化的物語を生み出しました：

- ローマ時代：征服と拡大は「文明化の使命」として称賛された
- 封建時代：神権と自然のヒエラルキーが宗教によって押し付けられた
- 現代：「市場の効率性」「富の創造」が社会的な善と称賛される

その結果、共感の欠如・地位への執着・他者の搾取への躊躇のなさといったサイコパシー的特性が、富と権力の蓄積において有利に働く社会が生まれました。協力と公平性を優先する倫理的な個人は、競争と搾取が報われるシステムの中で構造的に不利になります。

この文化的変化は、心理学者が「パソクラシー (pathocracy)」と呼ぶ状態を作り出しました——サイコパシー的特性を持つ個人が、そのシステムを最も効果的に搾取できるため、権力の

地位に上り詰める社会です。搾取の仕組みが洗練されるほど、このような特性が選好され、報われるようになります。

## 最終的な帰結：自己破壊

この進化の究極の結果は、人類が自らの生存に必要なシステムを自ら積極的に破壊するというパラドックスです。蓄積と支配への衝動は以下をもたらしました：

1. **資源戦争**：石油・水・レアミネラルなどの枯渇する資源を巡り、国家や企業が支配維持のために戦争をも辞さない
2. **環境崩壊**：有限な惑星上での無限成長の追求が、気候変動・生物多様性の喪失・生態系の破壊を引き起こす
3. **社会の分断**：極端な不平等が社会不安と対立を生み、搾取される側がますます絶望的になる

これは人間を独特の危険性を持つ存在にするものの究極の現れです：生存本能を上書きするシステムを作り出す能力です。動物は短期的な利益のために自らの生息地を破壊することはありません。しかし人間は、所有と富の抽象システムを発展させ、コストを外部化し、長期的な生存を脅かしても蓄積を追求できるようになりました。

## 結論

ローマの征服から現代資本主義に至る進化は、搾取システムの継続的な洗練の過程でした。それぞれの段階はより洗練され、抽象的になり、多数から富を抽出し少数の手に集中させる効率を高めてきました。見えない所有構造と金融メカニズムを持つ現代資本主義は、これまでに開発された最も進んだ搾取形態です。

特に悲劇的なのは、私たちには別のシステム——協力・持続可能性・集団的幸福を個人蓄積よりも優先するシステム——を創り出す能力があるということです。課題は、これらの搾取システムが自然でも必然でもなく、人間が作り出したものであり、再設計し置き換えることが可能なのだと認識することにあります。

この社会組織の根本的な欠陥に取り組むまで、人類は自ら作り出したシステムに駆り立てられ、自己破壊の道を歩み続けるでしょう。選択は最終的に私たちに委ねられています——搾取を洗練し続けて自滅するか、協力・持続可能性・共有された繁栄を原則として社会を根本的に再構築するか。